

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13089

研究課題名（和文）明内府制通俗彩絵本から見る近世中国通俗文学と視覚文化の関係

研究課題名（英文）The Relationship between Early Modern Chinese Vernacular Literature and Visual Culture as Seen in Illuminated Vernacular Literary Books Produced in Ming Court

研究代表者

松浦 智子（MATSUURA, SATOKO）

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：40648408

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明内府製の彩絵『楊文広征蛮伝』、彩絵『大宋中興通俗演義』、彩絵『西遊記』、彩絵『列国志伝』といった彩絵白話小説の制作と受容の諸相を考察した。結果、視覚効果を重視したこれらの作品が、坊刻の絵図入り書籍の制作・受容と垂直的に連動し、同時に、類似の形式を持つ他ジャンルの絵図本と水平的に連動しながら、明宮の女性、子供、宦官等を対象として制作された事を示す新知見を複数得た。また、これらの成果は、～の読書形態・意識や制作側の意図を解明しようとする、後継課題（23～25年度）23K00346「明内府彩絵通俗文学と絵図本など視覚文化から見た新興「読者層」の諸相」の採択に繋がった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の推進により、これまで分析がほぼ未着手状態にあった明内府制～彩絵白話小説群の制作・受容に、明宮やその圏域の女性、子供、宦官など中下級の識字者が関与しており、また、その制作・受容には、通俗的な娯楽機能だけでなく、宗教、政治、教育ほかの社会的機能が強くあったことを、複数の論文・発表を通して指摘することができた。これにより、従来大衆のものとしてその価値が軽視される傾向にあった通俗文学資料に、実際には、文学研究の領域においてはもちろん、中国の社会史、政治史、宗教史など各方面においても、重要な情報を提供する資料となり得る価値があることを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the production and reception of illuminated vernacular novels produced in the Ming court, including (1) "Illustrated story of Yang Wenguang," (2) "Romance of the Song dynasty revival," (3) "Journey to the West", and (4) "Chronicle of various countries." The study yields several new insights into these works that emphasize visual effects, including how they were vertically linked to the production and reception of illustrated books produced by private booksellers and horizontally linked to illustrated books from other genres with similar formats, and how they were produced for women, children, and eunuchs at the Ming court. These insights led to "Aspects of the Emerging 'Readership' from the Viewpoint of Visual Culture, including Illuminated Vernacular Novels and Illustrated Books Produced in the Ming Court," a successor study that aims to clarify the intentions of the creators of (1)to(4) as well as how these works were read and understood by readers.

研究分野：中国古典文学

キーワード：明代内府彩色絵図本 通俗文学 視覚文化 識字層 大宋中興通俗演義（岳飛） 出像楊文広征蛮伝（楊家将） 全像金字西遊記 春秋五霸七雄通俗演義列国志伝

1. 研究開始当初の背景

明の中後期、科挙制度の変化や銀流通の世界化に伴う経済の伸張などを背景に、出版・書籍文化が勃興した。これにより、それまで文字化されることのなかった基層の通俗芸能や物語が、通俗白話文学として大量に書籍化されるようになった。通俗的な白話文を用いた文学の大量出現は、それまで主に支配層とその周辺に属す知識人男性のものであった「読書」行為を、新たな層に拡大する一つの原動力となったと考えられる。明後期における、「新興読者層」の登場である。

一方、この同時期、歴史などの研究分野でも指摘されるように、中国社会全般に階層の流動や顛倒がおき、社会構造に大きな変化が起きはじめていた(森正夫 1979)。明後期から始まったこの変動を、清代以降に生じた近世から近代への脱皮現象の第一歩として重視する論も提起されている(岸本美緒 2012)。ならば、現今中国につながる基盤をつくったとも言えるこの変動は、決して看過することのできないものだと言えるだろう。では、この構造変化の要因はどこに求められるのか。

いかなる形態の媒体にせよ、情報の「大量」伝達を可能にするメディアに接する層が拡大すれば、社会や文化の構造に変化が生じることは、ネットメディア登場後に激変した現在の世界状況がよく示しているだろう。ならば、明後期に生じた社会的な変動は(要因は多岐にわたるものの)やはり文字メディアと接する層が急拡大したことが、大きく関係していたはずである。その意味で、通俗白話文学の普及とともに現れた「新興読者層」は、文学領域だけでなく、史学、社会学にとっても極めて重要な意味をもつことになる。しかし、通俗白話文学の「読者層」については、その「通俗性」ゆえか、文字資料が不足しており、実態は依然として不明な点が多いままであった。

2. 研究の目的

こうした背景を踏まえ、本研究では、明後期に出現した「新興読者層」が中国社会に与えた影響力を重視する立場から、未解明部分の多い通俗白話小説の「読者層」についてその実態について考察することを試みた。

では、この時期の「読者層」に関する文字資料が不足しているなかで、どのような方法を用いれば、本研究を効果的に進めていくことができるのか。その大きな手掛かりとなるのが、小松謙 2010 も指摘するように、明後期に刊行された通俗白話文学に、挿画や絵図が多くみえるということである。文字による記述内容の理解を補助する絵図が、明後期の通俗白話文学に多く附されたということは、その受容者に中下級の識字者が含まれていたことを示唆している。ならば、書籍に附された挿画や絵図などの視覚文化は、通俗白話文学の「読者層」つまり受容層を検証する上で、好材料となるはずである。

一方、挿画・絵図をもつ通俗白話文学(以下、絵図白話文学とも称す)は坊間だけで制作・受容されていたわけではなかった。それを示すのが、明内府/明宮で制作・受容されていたと推定される次の ~ b の彩色絵図通俗白話文学作品群(以下、彩絵通俗白話文学とも称す)である。

- ・ 彩色挿絵鈔本『春秋五霸七雄通俗演義列国志伝』8巻16冊。韋力氏個人蔵本。彩色挿絵影印本あり。明坊刻『列国志』諸版本に基づき制作か(彩絵『列国』)
- ・ 彩色絵図鈔本『唐玄奘法師西天取经全図』/『全像金字西遊記』。A 北京大学図書館蔵本 [NC1838-0023] 存帖本3冊、彩色絵図140半葉。B 日本東北大学図書館蔵本 [KK224/006] 存帖本1冊、彩色絵図28半葉(彩絵『西遊』)
- ・ 彩色絵図鈔本『出像楊文広征蛮伝』存零本2冊。日本東洋文庫蔵本 [XI-3-B-33] 明坊刻『征蛮伝』(佚)に基づき制作か(彩絵『征蛮』)
- ・ a 彩色挿絵鈔本『大宋中興通俗演義』存巻4,5,6,8,9及び附録『精忠録(後集)』。彩色挿絵計26半葉。中国国家図書館蔵本 [善 09842] 明坊刻『新刊大宋中興通俗演義』に基づき制作か(彩絵『大宋』)
- ・ b 坊刻刊本着彩『新刊大宋中興通俗演義』存巻1。着彩挿画8半葉。中国国家図書館蔵本 [善 15725] 万曆二十年頃周日校万卷楼仁寿堂刊本の挿画に着色。(坊刻着色『大宋』)

~ a はみな白綿紙に十数種類の色料で鈔写された彩絵(b は刊本着彩)と、明内府制書籍の特徴である四周双辺紅格(のみ黒格)の版式を持つ通俗白話文学である。注目されるのは、

a が、民間書房の刊本に基づき制作されたものだと推定されることである。というのも、坊間の書肆と連動するように、明宮でも彩絵/絵図白話文学が制作・受容されていたのならば、

~ a の制作・受容に関わる群体がどのような人々により構成されていたのか解明することで、不明点が多い「新興識字層」についても、その一端に光をあてることができるはずだからである。

そもそも、これら ~ b が明宮で制作・受容されていたということは、通俗白話文学研究にとってきわめて重要な意味を持つ。にもかかわらず、これまで ~ b の存在があまり知られていなかったためか、その考察は、各作品に対する数本の個別研究に留まっており(磯部 2012、

上原 2017、松浦 2018) ~ の体系的研究は未着手状態にあった。

そこで、本研究では、読者層の拡大を示唆する絵図白話文学が、坊間だけでなく明宮という上層でも制作・受容されていたことを重視し、~ bの彩絵白話文学を体系的に分析することで、明後期の社会構造の変化にともなって出現した新たな「読者層」・受容層の実態を解明していくことを企図した。また、絵図白話文学の受容者の様相は、その制作・供給側の分析からも浮かび上がる面があるため、絵図を重視した白話文学を制作した人々の意図・背景がどのようなものだったのか、供給側の諸相についても同時に探っていくことを試みた。

3. 研究の方法

~ の分析に際し問題となるのは、その制作者や受容者に関する明確な記述が作品上に残されていないということである。一方、明宮には ~ と酷似する体裁をもつ、その他ジャンルの彩絵本/経典、着彩本/経典、絵図白話刻本が多く存在する。明の初中期より、明宮ではこうした彩色/白黒絵図を附す多くの経典や、彩色/白黒絵図と白話を組み合わせた勸戒書・教科書などが複数制作・受容されていた。これら明宮にかかる絵図本/経典は、体裁面だけでなく、時に内容面においても ~ 彩絵白話小説と少なからぬ共通項を持つ。これらの点に着目し、本研究では具体的に以下の二つの側面から検証をすすめた。

- ・A：書籍の版式・絵図など外形的体裁の分析から制作年代・場所・経緯を考察する。
- ・B：作品内意・ジャンルの視点から制作・受容に関わる諸相を考察する。

まず、Aであるが、彩絵『本草品彙精要』、彩絵『御製全真群仙集』、彩絵『真禪内印屯證虚凝法界金剛智經』といった、制作命令者、制作指揮者、製作場所・時期等についての情報を明記した複数の彩絵本/経典を活用し、その版式や用紙、絵図の画風・構図・着彩技法・使用色料他を比較実見調査することで、~ の制作場所・時期や、制作に関与した人々の群体、属性の割り出しを試みた。

また、Bについては、~ 以外の絵図本/経典のジャンルが、宗教系(~ その他多数)や、彩絵『明解増和千家詩註』、(彩絵)『帝鑑図説』、『養正図解』、『人鏡陽秋』、『閨範図説』など、勸戒書・女教書・教科書系に集中していること、そして、その受容者の多くが宮中の女性、子供、宦官などであったことに着目しながら、~ の受容者の群体や属性について解析を進めた。さらに、~ が内容面で「戦争・戦闘」とも親和性があることに注目し、同時代に多く制作されていた武人・官員の「紀功図」(馬雅貞 2010)等との比較検証も行うことを試みた。

4. 研究成果

上記AとBの検証は、絵図本/経典や版本等の実見調査を前提としており、本来、2019年度~21年度の三年をかけて、これら版本調査も含めて分析を進める予定であった。しかし、19年度末に始まったコロナ禍の影響により、国外への長距離移動はもとより、国内の近距離、中距離移動もままならず、国内外の図書館や研究諸機関もその閲覧調査に長期制限がかかった。そのため、コロナによる移動禁止や閲覧調査制限が緩和・解禁された23年度まで本研究を延長する措置をとることになった。

一方、コロナ禍から一年ほど経過した頃から、Web上での資料データの開放や、オンラインでの学会開催を試みる各図書館や研究諸機関が徐々に増えたため、本研究でも、これら電子媒体やオンライン学会の機会を積極的に用いて研究を進めていった。

こうした状況をふまえ、以下、2019年度~23年度の五年間の活動で得られた成果を、緩やかな時系列に沿って、項目ごとに記していく。

【 彩絵『征蛮』、 a 彩絵『大宋』、 b 坊刻着彩『大宋』の分析】

(1) まず19年度上半期には、北宋の楊家将を語る ~ と南宋の岳飛を描く ~ という「宋代もの」彩絵白話文学が明宮中で制作・受容された経緯・背景を検証した。結果、~ は明後期の宋代尊重の気風を背景として坊刻本に基づき明宮中で制作されたこと、明宮周辺の歴代宦官が ~ の附録『精忠録』を何度も重刊していたこと、~ の制作に「宋代もの」絵図白話文芸を通して自己宣伝を図る宦官らが関与していたこと、~ が宮中の女性や子供、宦官など中下級の識字者に受容されていたこと、等の複数の新たな知見を得た。本成果は論文「明代内府で受容された宋の武人の絵物語 ~ とくに岳飛の物語から」(『宋代史料への回帰と展開』、汲古書院、2019年8月)として結実した。

(2) 19年度下半期には、上記成果(1)の一部を発展させ、岳飛文芸が日本でいかに受容され展開していったのか、その過程と様相を江戸初期から昭和初期まで時系列に考察した。そのうち、aが基づいた坊刻『大宋中興通俗演義』及び同付録『精忠録』の絵図が、日本での岳飛文芸の展開・普及に関与していたとの新たな知見を得た。本成果は19年8月末に北京大学で開催され

た「中国古典文学在東亜伝播与接受」にて「關於岳飛“文芸”在日本的演变之初步調査」として口頭発表し、その後、論文「日本における“岳飛”文芸の展開」(神奈川大『人文研究』203、2021年9月)に結実した。また、研究成果の国際発信を進める北京大学の依頼のもと、本成果の中国語版「關於岳飛“文芸”在日本演变的初步調査」が、中華文明伝播史研究叢刊・劉玉才主編『東亜漢籍与漢文学論集 初編』(商務印書館、2023年9月)に掲載された。

(3) 22年度には、彩絵『征蛮』にのみ描かれる女武将の男装と擬制結婚のストーリーに着目しつつ、明清期の楊家将故事と木蘭故事にみえる女武将の身体描写について検証した。結果、彩絵『征蛮』をはじめ、絵図入『北宋志伝』『楊家府演義』、戯劇『雌木蘭』『双兔記』、絵図入『隋唐演義』など、「視覚媒体を主とする/多く含む作品」において、女武将の身体が、視覚情報を介在させることで、宗族の父権制論理を体現するものとして描写される傾向があったとの知見を得た。つまり、彩絵『征蛮』の絵図には、女性の身体が、父権制論理を体現するために存在することを伝える機能が備わっていたのである。本成果は、22年10月に日本中国学会第74回にて口頭発表した後、「田村容子著『男旦(おんながた)とモダンガール—二〇世紀中国における京劇の現代化—』をめぐる書評シンポジウム報告 通俗古典文学と「変化と連続性」の視点から」(日本中国学会2022年度『研究集録』、2023年4月)として論文化した。

【 彩絵『西遊』の分析】

(4) コロナの影響で、彩絵『西遊』A北京大蔵本の実見は現在に至るまで叶っていない。一方、Webで全葉公開されているB東北大蔵本とA本の一部影印(『北京大学図書館蔵書展覧第一回中国古蹟挿絵本選展』)がアクセス可能な資料資源として存在している。そこで、コロナ中の21年には、これらの資料を用いて彩絵『西遊』の制作・受容の背景などを検証した。その際、と類似する体裁を持つ明内府制の彩絵本/経典についての情報を、電子媒体などを用いて網羅的に収集・調査し、その書誌情報を一覧表化した。その上で、彩絵『目犍連尊者救母出離地獄生天宝巻』()、彩絵『九天応元雷声普化天尊説玉枢宝経』()、彩絵『仏母大孔雀明王経』()ほか仏道の彩絵経典や、明後期教派系宝巻等の周辺資料が、特に彩絵『西遊』と内容・要素的に共通項をもつことに着目し、これらの資料を活用することで、の制作の背景や受容者の属性などについて分析を進めた。結果、彩絵『西遊』の出現背景に宮中の妃嬪や公主、宦官、皇太子も関与する政治的、宗教的な動きが存在したことを明らかにした。このうち、宗教的動きの一部には、明後期の弘陽教ほか無為教系の各種宗教団体も関わっていたことを見だし、彩絵『西遊』が宝巻の宣巻のような「絵解き」形式によって受容されていた可能性が高いことを指摘した。本成果は、21年10月開催の台湾国立中興大学のシンポジウム(オンライン参加)にて「明代内府繪圖本文化初探：以西遊記の彩色繪圖本爲中心」として口頭発表した後、論文「明代内府の絵図本と視覚文化について—西遊記の彩色繪圖本を中心に—」(『非文字資料研究』27、2023年9月)としてまとめた。

【 彩絵『列国』の分析】

(5) 彩絵『列国』は基礎研究が一番少なく、その制作時期や場所については曖昧な部分が多く残っていた。そのため、その制作・受容の諸相を探るためには、まず制作年代・場所や、制作の際に使用した坊刻版本等を書誌学的に確定する必要がある。そこで、本研究の最終年度にあたる23年度には、泰和嘉成拍賣公司刊行の挿画影印本に掲載される絵図と金字、本文の一部の情報を用いて、坊刻『列国志』の明刊諸版本と字句の対比較勘を行い、またその忌避字の確認などをおこなった。結果、の絵図に犬の容貌をした「犬戎」の絵が描き込まれていることや、文字に清代の忌避字が見えないことから、彩絵『列国』の制作年代は清代にはずれ込まず、明万曆以降に刊行された坊刻『列国』12巻本、8巻本を同時に参照しながら制作された、もしくは現存の坊刻『列国』12巻本、8巻本を利用して刊行された佚本をもとに明宮圏域で制作された、との知見を得た。本成果は、2023年11月に台湾嘉義大学の国際学会「彩繪《春秋五霸七雄通俗演義列國志傳》的初步探討」として口頭発表した。また、24年秋刊行予定の同大学の学術雑誌に、その論文の掲載が決定されている。

(6) (5)で行った彩絵『列国』の書誌学的同定作業を踏まえ、同23年度には、彩絵『列国』と共通する内容・要素を持つ、平話や明内府雑劇、そして明内府圏域で制作された絵図白話型式の勸戒書、女教書(『帝鑑図説』、『養正図解』、『人鏡陽秋』、『閨範図説』他)を用いて、の制作の意図・背景や、その具体的な受容者の属性の解明を試みた。結果、これらの平話、雑劇、勸戒書、女教書が、の内容と、文字面だけでなく絵図面でも高度に一致している、との新たな知見を得ることができた。この知見は、彩絵『列国』に、勸戒書や女教書のような教育的機能を期待して制作された側面があることを示しており、また、その受容者として、明宮圏域の中下級の識字者である妃嬪、公主や皇太子とその学友、そして宦官などが具体的に想定されていたことも示している。本成果は、23年12月に台湾中央研究院の国際学会で「手鈔彩繪《春秋七雄通俗演義列國志傳》與其周邊繪圖本」として口頭発表した。

【 ～ 彩絵白話文学と陽明学派】

(7)23年度には、上記の(5)(6)の検証と並行して、～制作・受容の背景に広がる人間関係や意図について考察を試みた。具体的には、～と類似する、明宮圏域で制作された「絵図+白話」という形式をもつ勸戒書・女教書群に着目し(『聖功図』(佚)、『饑民図説』、『御世仁風』)、その制作者の人間関係と制作の意図を検証した。結果、～、～の勸戒書・女教書は、相互に繋がりをもつ陽明学派の士大夫によって政治・教育意図のもと制作されたものであり、実際に明宮のなかで極めて政治的に機能していたとの知見を得た。また、これらの絵図白話式の勸戒書・女教書は、内容面でも、特に彩絵『列国』、a彩絵『大宋』とも強い繋がりを持っていることを見いだした他、aの附録『精忠録』の一部が、～の編集者とも強い繋がりをもつ陽明学者・徐階の文集に採録されているとのことも指摘した。これらの事実は、～が出現した背景に、宦官や女性、子供といった中下級の識字者の群体の他に、陽明学派といった高級知識人たちなどの存在が影響していた可能性があることを示している。本成果は、23年6月にYale大学の国際学会で「明代内府繪圖本初探：陽明學、繪圖白話勸戒書與彩繪通俗小説」として口頭発表した。

以上、19年度～23年度の計五年に渡る研究期間において、～の制作・受容に関わる問題について少なからぬ知見を得ることができた。一方、～の検証を進めるにつれ、当初想定していた以上に、明宮とその圏域で彩絵本/経典や絵図白話本/経典が多く作られていることが明らかになってきた。また、その制作・受容の群体も中下級の識字層を主体とした一枚岩ではなく、さらに、制作意図、受容方式にも、宗教、政治、教育など様々な要因が複雑に絡まっていることが分かってきた。ならば、～の制作・受容と連動する、明後期の「新興読者層」の様態をさらに解明するためには、この複雑に絡まった明宮圏域の絵図白話資料群をさらに丁寧に解きほぐしていく必要があるはずである。

また、当初の計画では、明後期に多数制作された「紀功図」との比較検証も行う予定であったが、コロナなどの影響で、この項目の検証はほぼ未着手状態にある。これらの状況に鑑み、報告者は上記の未解決事項の検証を進めるべく、本研究の後継課題として基盤(C)23K00346「明内府彩絵通俗文学と絵図本など視覚文化から見た新興「読者層」の諸相」を申請し、採択された。

そのため、24年度現在も、上記の成果を踏まえ、明宮、絵図(紀功図を含む)、通俗白話文学、坊刻本、読者層などをキーワードとし、明代後期に出現した「新興読者層」がいかなる群体によって構成されていたのか解明を試みながら、彼らが明末以降の中国社会に与えたインパクトについて検証を続けている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 松浦智子	4. 巻 2022年度巻
2. 論文標題 田村容子著 『男旦（おんながた）とモダンガール 二〇世紀中国における京劇の現代化』をめぐる書評シンポジウム報告 通俗古典文学と「変化と連続性」の視点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本中国学会 2022年度『研究集録』	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松浦智子	4. 巻 203
2. 論文標題 日本における“岳飛”文芸の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文研究	6. 最初と最後の頁 305-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松浦智子	4. 巻 第十九、第二十期
2. 論文標題 東洋文庫蔵《出像楊文廣征蠻傳》考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際漢学研究通讯	6. 最初と最後の頁 133-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 松浦智子	4. 巻 11
2. 論文標題 明代内府で受容された宋の武人の絵物語 とくに岳飛の物語から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宋代史研究会報告集（11）宋代史料への回帰と展開	6. 最初と最後の頁 147-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松浦智子	4. 巻 2019年度号
2. 論文標題 武人の物語と現実社会の動き 還流する虚構と現実	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究集録（日本中国学会）	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松浦智子	4. 巻 27
2. 論文標題 明代内府の絵図本と視覚文化について 西遊記の彩色絵図本を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『非文字資料研究』	6. 最初と最後の頁 199-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松浦智子	4. 巻 1
2. 論文標題 関于岳飛“文芸”在日本演变的初步調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中華文明伝播史研究叢刊・劉玉才主編『東亞漢籍与漢文学論集 初編』	6. 最初と最後の頁 399-424
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 松浦智子
2. 発表標題 『男旦（おんながた）とモダンガール：二〇世紀中国における京劇の現代化』書評発表「変化と連続性の視点から」
3. 学会等名 日本中国学会第74回
4. 発表年 2022年

1. 發表者名 松浦智子
2. 發表標題 明代內府繪圖本文化初探 以西遊記的彩色繪圖本為中心
3. 学会等名 台灣中興大學：第14屆通俗文學與雅正文學「媒材與傳播」國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 發表年 2021年

1. 發表者名 松浦智子
2. 發表標題 關於岳飛“文芸”在日本的演變之初步調查
3. 学会等名 中國古典文學在東亞傳播與接受（國際学会）
4. 發表年 2019年

1. 發表者名 松浦智子
2. 發表標題 明代內府繪圖本初探：陽明學、繪圖白話勸戒書與彩繪通俗小說
3. 学会等名 The Middle Period Chinese Humanities Conference, “Stuck in the Middle? The Third Middle Period China Humanities Conference (220-1600) 深陷中間？第三屆中古中國人文會議（220-1600年）（國際学会）
4. 發表年 2023年

1. 發表者名 松浦智子
2. 發表標題 彩繪《春秋五霸七雄通俗演義列國志傳》的初步探討
3. 学会等名 傳播與傳承：第七屆中國小說與戲曲國際學術研討會（國際学会）
4. 發表年 2023年

1. 発表者名 松浦智子
2. 発表標題 手鈔彩繪《春秋七雄通俗演義列國志傳》與其周邊繪圖本
3. 学会等名 書頁邊緣：中國書籍史與文本政治國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松浦智子
2. 発表標題 明内府製の手鈔彩繪本 / 經典の系譜：手鈔彩繪小説との関係から
3. 学会等名 中国古典小説研究会2023年度大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------